

震旦は秦にはじまる

—『今昔物語集』卷十第一話にみる歴史認識—

宮 田 尚

1

卷十第一話「秦始皇、在感楊宮政世語」は、秦の建国と滅亡とに關するものがたりである。そこには、始皇による咸陽宮の造宮と長城の建設が語られ、高大夫を殺した報いとしての始皇の死が語られ、二世に對する大臣趙高の反乱から、子嬰の逆クーデター、さらに、その子嬰が項羽に殺害されて秦が滅亡するまでの、波瀾に富んだ歴史が語られている。

続く第二話は、龍王の子としての高祖の誕生と、彼の存在における始皇のものがたりであり、第三話は、その高祖が項羽を倒して漢を興すにいたるものがたりである。

卷十の巻頭の數話は、いわれているように、卷一の仏教創始、卷六の仏教渡震、および卷十一の仏教渡日等の諸巻に對應する、皇室史あるいは國家創始のものがたりの配されるべき個所である。その卷十が、こうして秦に關するものがたりではじまり、やがて漢のものがたりへと展開されていることは、とりもなおさず、秦こそが中國における國家の始原だとの認識を、『今昔物語集』の編者がもつ

震旦は秦にはじまる —『今昔物語集』卷十第一話にみる歴史認識—

ていたことを意味しよう。

「今昔物語集」のこの認識が、なにかに啓発されたものであるのか、あるいは獨創にかかるものであるのか、そのあたりの事情はつまびらかでない。しかし、いずれにしても、秦を中國の歴史の起点にすえようとする『今昔物語集』の姿勢は、三皇五帝から説きおこす当時の一般的な歴史認識とは、あきらかに一線を画しているといつてよいであろう。

「今昔物語集」が、三皇五帝を無視し、秦を重視するという斬新な方法を採用したことについては、ややもすれば、それが仏教史觀にのつとつた作品だからであり、卷十の巻頭への秦のものがたりの配置は、仏教渡來以前の歴史としての三皇五帝を排除したことによる、ひとつの結果にすぎないかのような印象をあたえがちである。だが、それはどうやら、繰り上げ当選などという消極的な理由によるものではなかった。

「今昔物語集」は、秦を意識している。巻頭への秦のものがたりの配置は、単なる結果ではなく、それ自体がすでに目的であつたかのようなのである。

「今昔物語集」の秦、あるいは始皇へのこだわりを、以下、具体的にみていきたい。

2

第一話は、始皇の人となり、および事蹟についての、つぎのような総括的な説明にはじまる。

今ハ昔、震旦ノ秦ノ代ニ、始皇ト云フ国王在ケリ。智リ賢ク心武クシテ世ヲ政ケレバ、国ノ内ニ不随ヌ者无シ。少シモ我ガ心ニ違フ者ヲバ、其ノ頸ヲ取り、足・手ヲ切ル。然レバ、皆人、風ニ靡ク草ノ如キ也。

秦の初代の皇帝である始皇に、国人はことごとく従ったという。この結論の部分にもんだいはない。

しかし、「国ノ内ニ不随ヌ者」のなかつたその理由を、「智リ賢ク心武ク」と評しうる始皇の為政のゆえであったと第二の文ではいい、軒を接した第三の文では、「風ニ靡ク如」くに従った理由として、「少シモ我ガ心ニ違フ者ヲバ、其ノ頸ヲ取り、足・手ヲ切」ったからだとして説明している。この食い違いは見のがすわけにはいくまい。

いったい、これはどういうことなのか。国人が始皇に従ったのは、彼の人柄や為政にひかれての自発的な行動であったのか。それとも、批判の許されない恐怖政治がしかれたことによる他発的な管為であったのか。

始皇の為政に対する、この相拮抗するふたつの説明は、本来、同じものがたりのなかにあつてはならないはずのものである。この問

いに対する解答は、いずれがものがたりの内容に則しているかを検することによつて求められなければならない。

国人が始皇に従ったのは、自発か他発か。ものがたりそのものは、どちらの立場に近いか。

結論的にいえば、ものがたりの伝えているところは、あきらかに後者に近い。

たとえば始皇は、愛馬が高大魚のために海にくわえ込まれる夢を見ていかり、賞を出して国人たちに高大魚を殺させようとする。また、不死の薬の入手を高大魚によつて妨げられたとの方士の報告を受けてますますいかり、射手を派遣するが、それが果せないとい知ると、ついにはみずから大海におもむき、目的を達する。

けつきよく彼は、この高大魚の射殺の報いで病をえ、そのまま客死することになるのだが、高大魚を相手にくりひろげられる始皇のありようは、まさしく、序段に示された「少シモ我ガ心ニ違フ者ヲバ、其ノ頸ヲ取り、足・手ヲ切ル」に通じるといってよいであろう。

この高大魚退治のものがたりに先立つて語られる「焚書」の一件は、「坑儒」とともに、始皇の為政を象徴するものとして後世に未永くその名をとどめることになる。この思想弾圧が恐怖政治そのものであることはいうまでもない。

さきによれたところと一部重複するけれど、第一話でとりあげられている始皇の事蹟は、咸陽宮の造営と長城の建設、焚書、高大魚退治、および生存をよそおつての遺骸の帰還の四点である。これらのうち、量においても質においても中心をなすのは、なんといつて

も高大魚退治に関する部分である。その高大魚退治に加えて、焚書
の一件もまた、始皇の強圧的な政治のありかたを反映しているの
であるから、始皇のものがたりは、大勢として、「少シモ我が心ニ違
フ者」に制裁を加えたために国人が従ったのだとの立場にたつてい
るとみなしてよいであろう。

これに対して、一方の、「智リ賢ク心武ク」に相当する事蹟は、
第一話のなかには見当らない。しいていえば、みずからの死を予知
した始皇が、死の公表による国家の混乱を避けるために、生存をよ
そおつて遺骸を都に運ぶよう遺言するくだりが、あるいは「智リ賢
ク」にあたるかともおもわれるが、「今昔物語集」での用例からす
ると、その解釈には無理がある。同じ理由で、咸陽宮の造営や長城
の建設を、「智リ賢ク」とも「心武ク」ともとらえることはできな
い。

要するに、ものがたりの内容に徴するに、国人が始皇に従つた
理由としての「智リ賢ク心武クシテ政ケレバ」に相当する部分はな
く、完全にこの説明は浮いていることがあきらかなのである。

ものがたりの内容から遊離した総括的な説明が、こうしてかかげ
られているのはなぜなのか。やはり結論的にいえば、これはおそら
く秦、あるいは始皇のものがたりを巻十の巻頭へすえることへの、
抵抗感を弱めようとの配慮にもとづく措置であろう。

通念にあらがって、「国史」の第一頁を秦のものがたりでかざろ
うとするについては、始皇の事蹟は、いかにも肯定すべき要素がな
さすぎる。龍の子として生まれたという高祖のような、出自の奇瑞
もなければ、強者に終始しているわけでもない。悲劇の英雄という

震旦は秦にはじまる — 「今昔物語集」巻十第一話にみる歴史認識 —

のには、生前の為政が障害となる。なるうことなら、強権政治の遂
行者としての、かならずしも好もしくもない印象をぬぐい去るか、あ
るいは薄めるかすることが望ましいが、そのような効果の期待でき
るエピソードは、どこにもない。そこで編者は、無理を承知のうえ
で、「智リ賢ク心武クシテ世ヲ政ケレバ、国内ニ不随ヌ者无シ」
の一文を挿入した。これは、そうした事情によるものではなかった
か。

「今昔物語集」が主人公に讃辞を呈するのは、めずらしいことで
はない。原典にない讃辞、たとえば、「幼稚ノ時ヨリ孝養ノ心深シ」
(九一〇)とか、「心ニ悟リ有ケリ」(一〇八)等をおきなうという方
法も、しばしば採用せられている。原典が特定できないので断定は
避けなければならないけれど、ことに巻十には、そうした傾向が強
いようである。ちなみに、巻十において、人物紹介に際して付され
ている讃辞を列挙すると、つぎのとおりである。

3 項羽・心武クシテ弓芸ノ方高祖ニハ勝タルニ

項伯・心武ク兵ノ道ニ堪タル事世ニ並ビ无シ。

張良・彼ノ項伯ト年来得意トシテ一事ヲ隔ル事无シ。

范增・年老テ兵ノ道極カリ。

樊会・人也ト云ヘドモ、鬼ノ如シ、一度ニ猪ノ片股ヲ食シ、

酒一斗ヲ一口ニ呑ム。

4 張騫・糸只者ニハ非ケルニヤトゾ

6 上陽人・並无ク形チ美麗ニ有様微妙キ

7 楊貴妃・形チ端正ニシテ有様ノ微妙キ事、世ニ並ビ无シ、光

ヲ放ツガ如キ也。

- 安祿山・心賢ク思量有ケル人
 8 招孝・心ニ悟リ有ケリ
 9 孔子・心賢クシテ悟リ深シ
 11 莊子・心賢クシテ悟リ広シ
 12 同右 心賢クシテ悟リ広シ
 13 同右 心賢クシテ悟リ広シ
 妻 心賢ク悟リ深カリケリ
 15 柳下恵・世ノ賢キ人トシテ人ニ重ク被用レタリ
 16 養由・心極テ猛クシテ、弓射ル事、射ト射ル者掌ヲ指スガ如シ
 17 李広・心猛クシテ弓芸ノ道ニ勝レタリ
 18 霍大將軍・心猛クシテ悟リ有リ
 20 紀札・武芸ノ道ニ勝レテ心直シ
 21 長安女・形美麗ニシテ心正直也
 23 医師・止事无キ医師
 24 賈誼・心ニ悟リ有テ文ヲ読ムニ愚ナル事无シ
 25 高鳳・幼稚ノ時ヨリ心ニ智有テ、昼夜ニ文ヲ学シテ更ニ他ノ思ヒ无シ
 26 文君・形端正ナル事、世ニ並无シ
 39 燕円・心猛ク悟リ有リ
 文人、武人、女性にそれぞれ讚辭の型があり、きわめて類型的であることが一見してあきらかである。卷十を特徴づけるこうした讚辭のうち、一部のものについては、『今昔物語集』が原典に付加したものであることをたしかめうる。類型的であることとあわせて、

讚辭にこのような事情があるところよりすれば、讚辭のうちのかなりの部分は、『今昔物語集』によって付加された可能性があるとみてよいのではないか。これを当面のもんだいに即していえば、第一話の「智リ賢ク心武クシテ世ヲ政ケレバ、国ノ内ニ不随ヌ者无シ」は、『今昔物語集』の段階で付加されたのみならず条件があるということになるであろう。

ただし、第一話の「智リ賢ク心武ク……」を、他の讚辭のばあいと完全に同列にあつかうことはできない。すでにふれたように、これはものがたりの実体と遊離して——というより、あまりにも露骨に齟齬していて、単なる讚辭とみなすわけにはいかないからである。

意図的な讚辭——それは、『今昔物語集』の秦、あるいは始皇へのこだわりの表出にはかならないであろう。

3

『今昔物語集』が秦、あるいは始皇へのこだわりを示していることは、たとえばまた、卷六の巻頭に秦に関するものがたりを配していることからいいうるであろう。

卷六は、さきにふれたように、仏教の渡震を伝えるものがたりで幕をあける。その第一話「震旦秦始皇時、天竺僧渡語」は、標題の示すとおり、始皇のとき天竺から僧が渡来したものがたりである。僧の名は利房。彼は十八人の賢者とともに、法文、聖教をたずさえて渡来した。始皇は、彼らの何たるかを知らない。利房らの異形に不快感をいだいた始皇は、尋問の後、彼らを投獄してしまった。だ

が、利房の祈念により、紫磨黄金の光を放って虚空に出現した丈六の釈迦如来は、難なく獄門を踏み破って彼らを救出した。以来、後漢の明帝のときまで、仏教は中国に渡って来なかった、という。

巻六第一話は、ざっとこのような内容である。要するに、始皇のとき天竺から仏教が渡って来たものの、弾正にあってほうほうの体で退去せざるをえなかったという、いつてみれば、これは仏教渡震失敗ものがたりなのである。

仏教の東漸は、苦難の歴史であつたらう。五岳の道士の抵抗に、彼らとの術くらべをせざるをえなかった摩騰迦のものがたり(六二)も、それから、造寺造塔をしただけでは功德をほどしたことにならぬと直言して武帝の不興を買ひ、追放された達磨のものがたり(六三)も、同じように受難のものがたりとしての側面をそなえている。仏教の渡震を伝えるべき巻六の幕あけに、けつして平坦ではなかつた東漸の歴史のひとこまを配するのは、意味のあることに違いない。

だが、それにしても、全面否定された渡震失敗ものがたりが巻頭にすえられているのはなぜなのか。巻頭は、なぜ利房のものがたりでなければならなかつたのか。

むろん、全面否定のものがたりだから巻六の巻頭をかざるものとしてふさわしくないというのではない。たとえ全面否定のものがたりであつたとしても、たとえば、それが初伝に関するものであるのなら、巻頭にすえられるのはむしろとうぜんであらう。

ところが、巻六第一話の伝える利房のものがたりは、初伝に関するものではないのである。そのことは、『今昔物語集』の編者も承

震旦は案にはじまる — 『今昔物語集』巻十第一話にみる歴史認識 —

知していて、第一話の末尾に、つぎのように記している。

其ノ後、後漢ノ明帝ノ時ニ渡ル也。昔シ周ノ世ニ正教、此ノ土ニ渡ル、亦、阿育王ノ造レル所ノ塔、此ノ土ニ有リ。秦ノ始皇諸ノ書ヲ焼クニ、正教モ皆被焼ケリ。此ナム語り伝ヘタルトヤ。

編者の知識によれば、周の代にすでに仏教は渡来しており、阿育王の造つた塔も中国にはあるという。そして始皇は、利房を拒絶したばかりでなく、すでに伝えられていた經典の類を、いわゆる焚書の対象として処分してしまつたのである。

これの事実関係が、客観的にみて正しいかどうかはもんだいではない。ここでは、仏教の伝来について、編者がこのように理解していたという主観的な事実を確認するだけで十分である。

要するに、編者は、利房のものがたりが仏教の初伝に関するものでないことを明確に認識したうえで、あえて巻六の巻頭にそれを配しているわけである。

達磨の渡来よりも摩騰迦の渡来が先んじ、さらにそれよりも利房の渡来の方が早かつたという仏教伝来史上の事実はあつたとしても、初伝でもなく、しかも全面的に拒絶されたものがたりで、渡震史を構成する巻六の巻頭をかざるのは、目的意識なくしてなされた措置だとは考えにくい、かなり思いきつた編成といふべきであらう。ことに、初伝でないことを知つたうえで、措置であるだけに、利房のものがたりが巻頭にすえられていることのもつ意味は、とりわけ重い。

ところで、仏教の渡震については、それ以後彼地に滲透していったという意味において、実質的な初伝ともいふべき摩騰迦らの渡来

を重視するのが一般である。この点は、中国でも日本でも変りない。

しかし『今昔物語集』は、その摩騰迦のものがたりを第二話にまわした。これは黒部通善氏の指摘するように、まさしく「ユニーク」な方法だといってよいだろう。『今昔物語集』は、ここでも通説にあらがっている。

もつとも黒部氏は、『今昔物語集』のこの方法にはすでに雛形があったがゆえに、「ユニーク」さの功績は、『今昔物語集』に直接影響をおよぼした散佚説話集の編者に帰すべきだと主張している。

『今昔物語集』の「ユニーク」さを、氏は、最終的に評価しているわけではない。

たしかに、氏の指摘するように、『仏祖統紀』では摩騰迦のものがたりに先立って、利房のものがたりがとりあげられている。けれども、だからといって、『今昔物語集』のもつ「ユニーク」さのほまれが、『仏祖統紀』や、それから派生したところの散佚説話集に帰するとはかきぎるまい。利房のものがたりが摩騰迦のそれより前に位置していることに關していえば、そうした資料によらなくとも、年代順に配列していくことによって必然的にえられるはずの話序だからである。後漢の明帝よりも秦の始皇の方が年代的に古いとの知識さえあれば、話序はとうぜん、『今昔物語集』にみるようなかたちにならざるをえない。

利房から摩騰迦へという配列が、編年体というごくありふれた編集方法によってえられるものである以上、『今昔物語集』からその「ユニーク」さをはぎとるためには、直接影響をおよぼした資料

に、同じ配列の存在することの確認されることが、最少限必要であろう。だが、現状ではそれは望むべくもない。

利房のものがたりは『打聞集』（第二話）と『宇治拾遺物語』（第一九五話）とに、また摩騰迦のものがたりは『打聞集』（第二話）に、それぞれ類話がある。これらとの内容、記文等の類似の状況からして、『今昔物語集』の利房と摩騰迦のものがたりの背後には、『打聞集』や『宇治拾遺物語』などともつながる資料があったとみなければなるまい。^(注2)ところが、『今昔物語集』と間接的にではあれつながるとみられるこれらは、いずれも編年体を採用していない。

おもうに、依拠した資料での配列のいかんにかかわらず、『今昔物語集』は、利房のものがたりを巻六にとりあげたということだけで、すでに、じゅうぶん「ユニーク」なのである。たとえば『打聞集』や『宇治拾遺物語』は、ほぼ同じかたりくちのものがたりをおさめてはいるけれど、それらと『今昔物語集』とを、同列に論ずるのは適当ではあるまい。なぜなら、前者では利房や摩騰迦のものがたりは、仏教伝来史上のひとつのエピソードとして、ものがたり自体の内包する特異性が機能させられている。それに対して『今昔物語集』では、史的展開の一翼をになわせるべく期待されている。つまり両者は、史的展開のひとこまとしての認識の有無という一点において、明白に一線を画しているのである。このことは、いわゆる散佚説話集にも、おそらく適用することができるであろう。たとえ依拠資料に利房のものがたりがあったとしても、それを導入して史的展開の一翼をになわせるかどうかは、ひとえに『今昔物語集』の

判断にゆだねられているのであり、一方には、無視する自由も、とうぜん残されている。そうしたなかにあつて、仏教伝来史を語る一般的な傾向とは趣きを異にしているのであるから、「ユニーク」さのほまれは、一にかかつて「今昔物語集」に帰するというべきであろう。それはけつして、雛形があるゆえをもって、そこなわれる性質のものではあるまい。

くりかえすことになるが、「今昔物語集」が利房のものがたりを導入しようとするとき、仏教伝来史の構成をもくろむものであるかぎり、原資料の配列の順序とかかわりなく、年代的に古い利房のものがたりを摩騰迦のものがたりに先行させざるをえない。ところが利房のものがたりは、かならずしも巻頭をかざるにふさわしい条件をそなえていない。これが初伝にかかわるものでないことも、編者は承知している。

したがって、もんだいは、なぜ「今昔物語集」が、にもかかわらず利房のものがたりをすくいあげたのか、それも、伝来史の一般的な理解にさからってまですくいあげたのかということになるわけだが、けつきよくのところ、たとえ迫害者としてではあつても、それが始皇に関するものがたりであつたからだと解するほかないであらう。

利房のものがたりは、角度をかえていえば、始皇のものがたりである。そして、利房のものがたりだという視座にたつたかぎり、巻六にとりあげられるべき理由はみあたらないのである。

巻十第一話においては「智リ賢ク心武クシテ世ヲ政ケレバ、国内ニ不随ヌ者无シ」と、始皇をたたえる文言をさしはさんでいるけ

震旦は秦にはじまる — 「今昔物語集」巻十第一話にみる歴史認識 —

れど、それがすぐ底の割れる讃辞であることからうかがわれるように、仏教史観にたつ者にとつて、まさしく始皇は否定されるべき皇帝であつた。否定すべき皇帝ではあるが、しかし始皇は、一方において、長城を築き、文字、度量衡、貨幣を統一し、あるいは官制や法律を整備するなど、はじめての中央集権的な統一国家を形成した皇帝として、無視することのできない存在でもある。

「今昔物語集」は、この点をじゅうぶんに理解していた。理解していたばかりでなく、それを積極的に評価しようとの立場にたつていた。秦を、あるいは始皇をおいて中国の歴史を語ることはできないとの判断があつたからこそ、逆にいえば、仏教伝来史と国史とを構成すべき部分の冒頭に、始皇のものがたりを配したのである。巻六と巻十との第一話に、いずれも始皇に関するものがたりがすえられているのは、依拠資料に引きまわされた結果としての符合なのではなく、編者の歴史認識による、とうぜんの帰結だと解すべきであらう。巻六と巻十との第一話への秦のものがたりの配置は、「今昔物語集」に史的展開の方法を採用しようとして決定された段階から、もしかしたら、それ以前からの既定の路線であつたかもしれない。それはさておき、「今昔物語集」は、仏教の側からの否定すべき側面と、好むと好まざるとにかかわらず認めざるをえない娑婆の現実とのほさまにたつたとき、少なくとも右の二例においては、後者を撰択したものであることは疑いがない。

これをもって「今昔物語集」を、ただちに世俗的な作品だというわけにはもちろんいけいけれど、基本的には仏教史観にたつ作品でありながら、かならずしもそれにとらわれない自由さ、価値観の

多様さをそなえた作品だとみなすことは許されるであろう。

4

利房のものがたりの背後に、『打聞集』や『宇治拾遺物語』につながる資料のあったであろうことを右にのべた。ことに巻六の冒頭の六話が、『打聞集』的な資料にもつづいている可能性は大である。そのことはすでに、何人かの論者によって論じられているし、わたしもかつて言及したことがある。^(註3)

『今昔物語集』が、『打聞集』や『宇治拾遺物語』の世界につながるものであるらしいことは、たとえば、両者のあいだにみとめられる外国種のもものがたりの、重複状況の濃厚さからもうかがうことができるであろう。すなわち、『宇治拾遺物語』にあつては、震旦関係話の十二話中八話、天竺関係話では七話中七話が『今昔物語集』と重複している。また『打聞集』にあつては、震旦関係話の八話中七話が、そして天竺関係話では五話中五話が『今昔物語集』と重複している。つまり、『宇治拾遺物語』の天竺・震旦関係話は八〇パーセント弱、『打聞集』では九〇パーセント強が、それぞれ『今昔物語集』と重複しているわけである。天竺関係話が『打聞集』『宇治拾遺物語』ともに百パーセントであることをふくめ、この割合はいちじるしく高いといわざるをえない。むしろ、『今昔物語集』から『打聞集』、あるいは『宇治拾遺物語』へというかたちでものがたりが流れているのであるならば、重複率の高いのはとうぜんである。だが、現実には、そうした流れを想定することはきわめてむづかしい。逆に、『打聞集』や『宇治拾遺物語』が『今昔物

語集』の資料として用いられたと考えることもできない。したがって、けつきよくのところ、この重複率の高さは、『打聞集』『宇治拾遺物語』のはぐくまれたのとはほぼ同質の環境のなかで、『今昔物語集』もまた形成されていったものであることを意味する、と解さざるをえないであろう。『冥報記』や『三宝感応要略録』などといった文献から、『今昔物語集』があらたに訳出したもののほかのかなりの部分は、特殊なものではなく、すでに巷間に流布していたものと同時のものがたりであった可能性は多分にあるものとみられるのである。

じじつ、震旦部のいくつものものがたりについては、あきらかに人口に膾炙していたことをたしかめうる。『打聞集』や『宇治拾遺物語』とは無関係だが、たとえば巻十第一話の一部であるところの、大臣趙高のものがたりも、そうしたもののひとつである。

趙高のものがたりのあらましは、つぎのとおりである。始皇の死後即位した二世に対して、反乱を企てた趙高は、人心の帰離をはかるべく一計を案じ、一頭の鹿を馬だと称して皇帝に献上した。とうぜん皇帝は、趙高の誤りを指摘する。思うつぼである。しばしのやりとりの末、いづれが正しいかを世人の判断にゆだねることにした。あんのじょう、人々は両者の勢力関係をおもんばかり、ことごとく馬だと答えた。こうして情勢の優位なることを確かめた趙高は決起し、二世をたおすことに成功したのであった。

『史記』あたりに端を発するらしい趙高のこのものがたりは、どういう経過をへてのものかさだかでないが、わが国では、まず歌詠みの世界で広まっていたようである。『俊頼髓脳』『奥義抄』『和

歌童蒙抄」など、「今昔物語集」と前後する歌論書の類に、粗密の差はあるけれど、同系統とみなしうる類話が収められている。そしてこれらは、いずれも、「拾遺抄」所載の藤原仲文の歌

かをさしてむまといふ人ありければかもをもをしとおもふなる
へし

の解説として付されている。

「拾遺抄」によれば、大中臣能宣のもとへ車の甍（かも）を借り
に人をつかわしたところ、ないとのことだったので仲文は右の歌を
詠んだのであった。能宣は仲文のこの歌に対して、

なしといへばをしむかもと思覽しかや馬とそいふへかりける
の返歌をしたためている。

「俊頼髓脳」以下の歌論書の類が、仲文、能宣の応答歌をとりあ
げて趙高のものがたりを付したのは、いうまでもなく、これを秀歌
だと判断したからであり、第二に、解説をつけなければ一般には理
解しにくいと判断したからであろう。じっさい、趙高のものがたり
についての知識なくして、仲文、能宣の歌はありえないし、また、
趙高のものがたりについての知識なくして、これを秀歌だとする判
断も出てはこない。

もっとも、趙高のものがたりの出所まで、すべての歌論書の作者
が知っていたわけではなさそうである。「奥義抄」には「日本紀に
見えたり」と、まったく見当はずれの注釈がほどこされている。こ
うしたところよりすれば、出所への関心とは切り離された別の次元
で、仲文、能宣の歌と趙高のものがたりとは、しっかり結びついて
いたということになるか。

震旦は秦にはじまる — 「今昔物語集」巻十第一話にみる歴史認識 —

なお、趙高のものがたりは、このほか「蒙求和歌」「十訓抄」「太
平記」「三國伝記」「壺囊抄」「連集良材」「統歌林良材集」「雜
和集」などにみえるが、つねに仲文らの歌と結びつけられているの
ではないし、また、後代になると、話柄の異なるものもあらわれ、
それはそれとして興味ぶかい変化の相を示す。が、これらは当面の
課題とはかかわりがないので、今は省略にしたがう。

ところで、源俊頼にとって仲文、能宣の歌は、よほど印象が強
かったらしい。「俊頼髓脳」には、二度にわたって彼らの歌を引用
している。俊頼はまた、彼らの歌に触発されたものでもあ
るか、趙高のものがたりを深く心にとどめており、みずからもそれを
ふまえた歌を詠んでいる。

田上に侍りけるころ、むかひの山きはに、おほきなるるの
し、の見えるを、小牛とこそみつれ、と人のいひけるを
聞てよめる

鹿を見つむまといひたる人たにもるをは牛とや思はさりけん
(散木奇歌集 巻九)

仲文、能宣のやりとりを高く評価し、みずからも趙高のものがた
りをふまえた歌を詠んでいる俊頼の「髓脳」は、すでにいわれてい
るように、「今昔物語集」巻十の資料として用いられているとみら
れる。

しかし、こと巻十第一話の趙高のものがたりに関するかぎり、両
者のあいだにはおおきな違いがあって、「俊頼髓脳」から「今昔物
語集」へという流れがあったとは考えられない。たとえば、反乱を
起すにいたる過程を、「俊頼髓脳」は、

二世と聞ゆるみかどおはしけり。そのみかどの父の王にも似ず愚かになむおはしける。時の大臣みかどの愚かにおはすけしきをみて、国を奪はむ心ありける。

とする。これに対して『今昔物語集』は、

此ノ国王ノ思ハク、「我が父始皇ハ国ノ内ノ事ヲ恣ニシテ諸ノ事ヲ心ニ任セ給ヘリキ。我モ亦、父ノ如クニ有ラム」ト思テ、世ヲ政ツ間ニ、大臣趙高ト申ヌ。趙高ノ思ハク、「此ノ国王、始皇ノ子ニ有レドモ、未ダ位ニシテ不久ズ。浅キソヲ猶シ如此シ。況ヤ位ニテ年来ヲ経ナバ、當ニ我が為ニ吉キ事不有ジ」ト思テ、忽ニ謀反ノ心ヲ蒞ヌ。

としている。二世が暗愚であるゆえをもって政權の奪取をはかったとする「俊頼髓腦」と、仲違いの結果、みずからの将来を懸念して政權奪取をはかったとする「今昔物語集」との、趙高の意思決定にいたる設定の相違は、「今昔物語集」の改変とみなしうる範囲をはるかに越えているのである。

また、たとえば、「俊頼髓腦」が、
王位をば奪ひたてまつりけるとぞいへる。

と、結果だけしか示していない反乱について、『今昔物語集』は、敗戦を予測した二世が望夷宮に籠城したこと、そしてそこから、助命を求めてつきつきに条件を出し、いずれも趙高によって拒否された後、ついにほろぼされたことなどを具体的に示しているという違いもある。ここでも「今昔物語集」は、「俊頼髓腦」をおおきく越えているのである。趙高のものがたりにおけるこうした相違については、第三の資料の介在を想定することなしに、とうていなっとく

いく説明をつけることはできないであろう。

それがなにであるかを具体的にいうことはできないけれど、少なくとも趙高のものがたりに関しては、「俊頼髓腦」にまさると判断された資料が別にあつたわけである。

『今昔物語集』巻十第一話は、そうした第三の資料に全面的にもたれかかっているのかもしれないし、複数の第三の資料を複合して構成されたものであるのかもしれない。いわゆる第三の資料の姿が具体的にでない以上、こうしたもんだいもまた、とうぜんの帰結として具体性を欠く。

はつきりしているのは、趙高のものがたりにおける「俊頼髓腦」の排除である。仲文、能宣の歌にみられる趙高のものがたりの伝承の素地と、それをふまえた「俊頼髓腦」の排除である。その理由がなにであるにせよ、ここには、「今昔物語集」の主體的な判断がはたらいているとみなければならぬ。

「俊頼髓腦」の排除と同義語である第三の資料の選択は、一方において、巻十第一話における秦のものがたりの選択もまた、「今昔物語集」の主體的な判断によるものであることを示唆するはずである。

「国史」と銘打たれた巻十の歴史意識が、どこまで巻十をつらぬいているかはともかく、「今昔物語集」の歴史認識が、こうして、秦に焦点をあわせたものであることは否定すべくもないようにおもわれるのである。

注1、「今昔物語集震旦部考」(同朋学報・昭43・6)

注2、拙稿「今昔物語集卷六の仏法渡震旦譚」(「打聞集研究と

本文」昭46・8 笠間書院)

注3、同右

震旦は秦にはじまる — 「今昔物語集」卷十第一話にみる歴史認識 —